

信越本線を下りの列車に乗って北上すると、春日山駅の真西、一キロばかり、古杉と老松が茂る凸形の山が、これから話す上杉謙信の居城、春日山城のあつたところです。自動車を山の中腹で降り、切り崖の山道を少し上ると、杉林で薄ぐらい三の丸に出来ます。上杉謙信の養子景虎がここに住み、謙信歿後間もなく、すぐ上方の一の丸にいた同じく養子の景勝から、鉄砲を打ち込まれたのが、越後の大悲劇、「お館の乱」の口火だそうです。うらさびしく、樹上のわさびや、藪かげの蛇に驚かされそな所です。三の丸の一隅には、取り残された土塀があります。四百余年前は、このようないし垣が、曲輪ごとにあって、その上に白壁に、狭間(さま)あります。鐵砲や弓を射る穴(あな)をつくった土塀か板塀が、きれいに建物を取り巻いていたでしょ。三の丸の鐵砲や弓を射る穴(あな)をつくった土塀か板塀が、きれいに建物を取り巻いていたでしょ。

春日山城

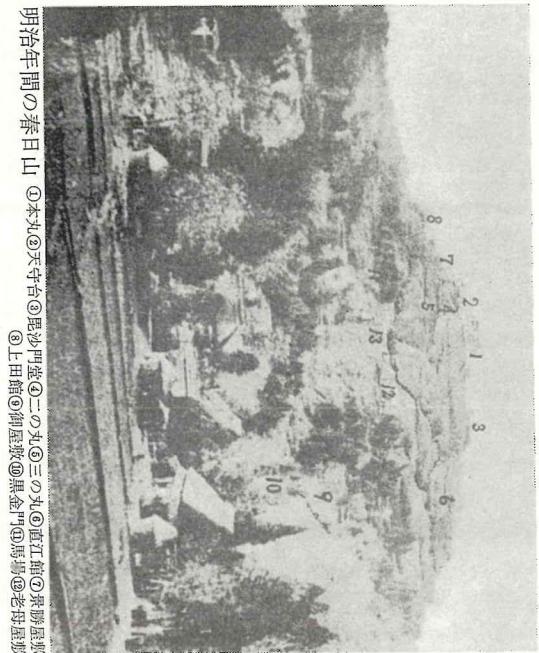
姿は、これまで、春日山城に外敵を一歩も入れない大自然の城壁です。

つ関田山系、続いて真南には、二四四六メートルの妙高・火打・焼の三山が肩をならべる雄大な
さざれ石のすうに凹凸はげしく、謙信公が、関東進軍である東頸城の山のみ、屏風のように立
城を守る大關門でした。

さて、東方遙かに、三陸節で知られた米山が見え、米山峠裏表を、越後統治のために往来した
軍物語や、謙信がじいの狼煙城にあがる「のろし」を、どれほどみつめたことか。米山は頸城内
で築いた謙信ゆかりの御館は、ちょうど、国道八号線の御館橋の西、信越線と北陸線の分岐点に
西岸がいわゆる越後の古都府中、今直江津で、山手に国分寺があり、関東管領上杉憲政を迎えた
統置いていました。東北方三キロには、荒川口が開き、東岸に、近代化した港や大工場が見えます。
た。日本海には佐渡島が浮かび、長河十里の犀海砂丘が、松の緑をたえて、遙か米山々麓まで
ずっと四キロ彼方の荒川はとりままで立並び、なお直江津の川口までも、城下町が続いています。
ぎる比、軍勢々揃の場、小峯ヶ原があります。多くの部将やかた、兵や庶民の家が、城下から、
は土塁と堀があり、大手門も巍然と立っていたのです。謙信公平時の御住居、御中屋敷の横をす

馬谷があり、それから頸城の平野に出る谷内に
なる山々など。本丸の東方、本城地区下方に但
下前に展開する頸城の広野、日本海、遠方に連
誰でも、息をのみ、歎声をもらすでしょう。眼
所にあります。標高僅か百八十メートルです
が、独立山塊ゆえに、雄大で、見晴らしよく、
本丸は、約十メートルばかりの切崖を上った
て堀まで繞っています。二の丸には古井戸が一
軍兵通路の帯ぐるわとして、直江やかたの大た
二の丸は、巾がせまく、ずっと北方まで伸び
てしよう。

丸の上り口に、門址らしい虎口のあるところ
に気付きます。鉄鋸金具のいかめしい門扉だっ

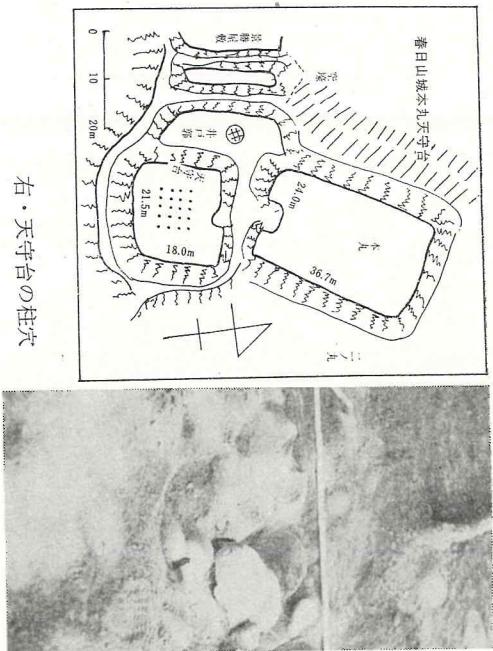


西方に目を向けしより。春日山城の三方をとり巻く、目の前の山嶺、外輪山のよらうに、中心けることは、西浜七谷が、日本海岸に、親不知子不知の嶮同様の天嶮を、いくつも運ねている点本姿、天皇と將軍をたすけて、乱世を平げ、民衆を救う大道達成の道ですが、眺望の中にうなずける。北西海上に、能登半島が水平線上に浮かび、名立・島ヶ岬に押寄せる黒潮に乗出舟人たちに、一朝事ある時に、日山を守る水軍として、さぞかし信頼の眼を向け、一面、食料資源として、塩や魚の供給を希ったことでしょう。遠景の美しさに比べ、これはまた足下に見る春日山西半の谷の何と恐ろいござりです。急崖に目めぐらむばかりです。

春日山本丸地区の堀の一線は南北ですが、東北の尾根は東に折れ、西南尾根は西に曲ります。本丸と並んで、やや低く、北側にある平地には、謙信公尊宗の諱訪神社と思沙門堂があつたのです。上り口に、祈禱の場、護摩堂がありました。上杉家重宝の八幡の弓、天賜の日章旗・毘沙門

何が無くても水さえあれば、要害地運地取りの
が流れこむように、地表に傾斜をつけてます。
夏でも水があります。本丸、天守台から、雨水
天主台を西にやや降ると、大井戸があり、真
頭脳に当る所です。

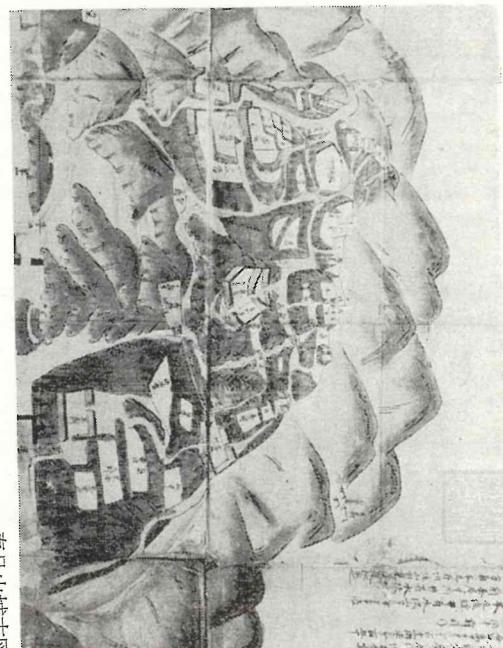
それらを指揮する所がこの高櫓なのです。城の
丸の城主の首を打つ前に、敵をせん滅させる。
ねらいうちする場を設けて、本城にとりつき本
迷路とし、鉄砲・弓・石・つぶてなどもつて
土塹・板塹・木柵・屈曲の道等々を巧に施して
工事(切崖・大小の横堀・堀切・縦堀・土塁・
が迫ります。本丸下の一の丸など本城の要害
に敵を誘いこみ、搦手地区の先端から、守備軍
す。これは逆乙字状の突角で、南西の追手地区



右・天守台の柱穴

つてしまふ。下を武器庫にしたと思われます
深さ四〇センチほど二層くらいの高やぐだ
三間に太柱を深く立て(柱穴は径三〇センチ、
は、昭和四十三年調査の結果、およそ、四面
本丸は、城主の最後の腹切り場です。天守台
大多分、平屋・板葺きのものだったでしょ。
は御館でさえ一片もなく、春日山も同様です。
上では暴風、地震、地滑り、大雪に堪える工法(瓦
ん。平地に穴を掘って建てた堀立式です。(山
近世のような大天守閣があつたのではあります
本丸と天守台は、空堀で区切られていました
す。

信公の墓・堀氏・松平氏・榎原氏の墓がありま
は、謙信の幼時の学問所でした。ここには、謙



春日山城古図

御指導下さいました鳥羽正雄先生、横井成広先生、伊藤正一先生の御教示に深謝申し上げます。

を述べたしidaです。

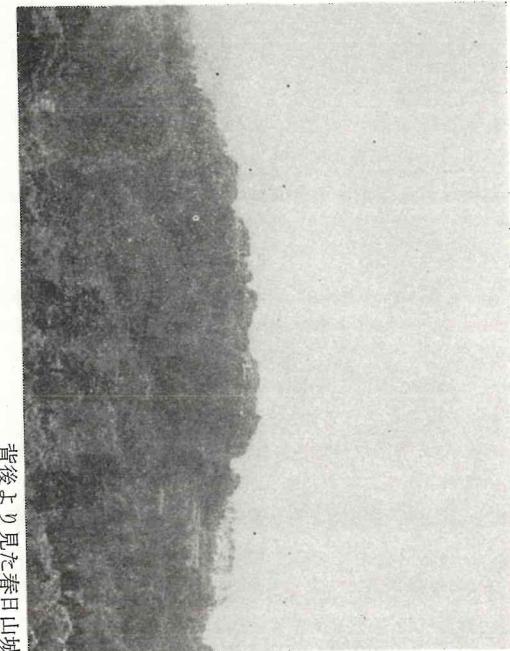
この説明は、上越高等学校七カ校の社会科学クラブ山城班の教師、生徒各位の研究をつくしました。春日山の大動脈です。

春日山は、頸城地方全域の地形から推して、敵襲は、東方口が絶対なるものです。ただ越中側を手薄で守れる意味かも知れません。御成道は、郷津の港から各地の物資を、城中に運搬する道

と数多の堀切があります。春日山の弱点でした。これにも一条件の大空堀や能生や名立方面の防衛強化命令とともに、春日山の弱点でした。これに謙信公が、陣中から下知して、防備工事をさせた所らしく、形が緩場や技術者の屋敷が、人目をさけ、監視の目もきびしかつたでしょう。谷口に番所址もあります

す。かじやしきという平地もあって、武器製造大少の部将やしきがあつたことを示しています。地に、幾筋かの横堀堀切や切崖が見え、ここに守ります。夏でも湿地で、水草が生えているる起きの頭部をとりまく、横堀とつなり、西方を地の谷(斬り落した谷)で区切り、景勝やします。西南の追手の丘と、本城地区とは、さんざう。首将を守る本地地区とは、ここで区切っています。かつては、はね橋があるたびでしょ

第一条の大空堀が深々と堀られ、這い上れないと崖曲輪群があり、そこへの道は、井戸郭に接して、に続く尾根の両側を削り、「景勝屋敷」と呼ぶ、第一が水です。井戸は心臓です。西曲輪から西



背後より見た春日山城

直江曲輪にまわって他の道と合流し、門址からお花畠、毘沙門堂⁽⁶⁾を経て本丸へそれぞれ通じて本丸へ、一本は、お花畠にて毘沙門堂の東下を通り⁽⁶⁾から本丸へ、もう一本は、沢を経て三の丸と米藏の中間を経てから三方に別れています。一つは、二の丸を経て袖曲輪⁽⁶⁾に通じ、本丸に通ずる道は幾すじもあり(馬場からの道は現在車道が作られた)、三の丸東下方より登の丸の東下方より南にかけての峰にも数段の削平地がほここしてあります。

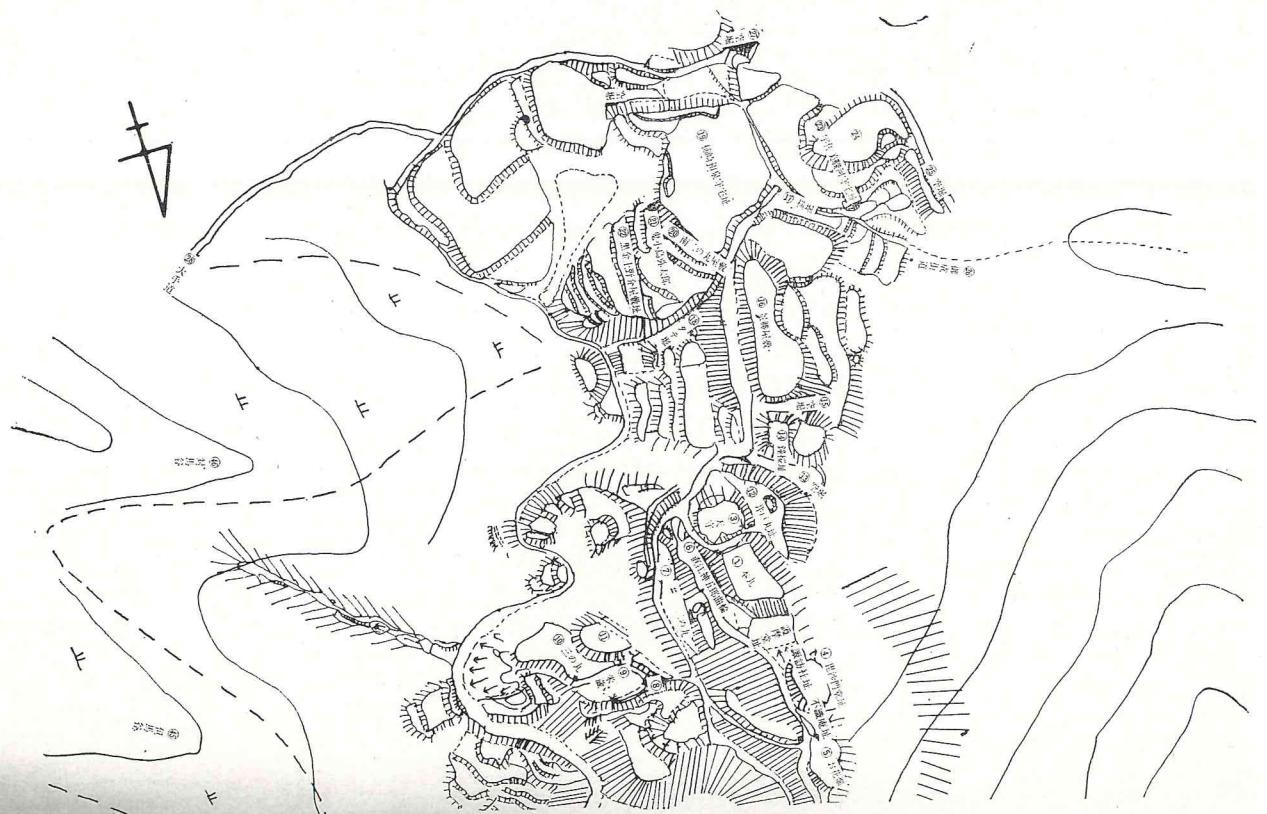
さらの沢に続き、沢の内は十数段の削平地があり、中には諸将の屋敷があつたと推定されます。三トロ下方に、三の丸が位置してもらいます。三の丸から、東下方に数段の削平地が、お花畠メートルの⁽¹⁰⁾があります。また二の丸の東下方に十五メートルの郭⁽¹¹⁾があり、二の丸十五メートルの⁽¹⁰⁾があります。高さ一、七メートル、長さ三十三メートルが東西にびいています。この南側に接して、三十二名は不明です。その北側に但馬谷と称する大沢がくへてあります。この沢の南に接して、土塁から東に数段の削平地がびており、二の丸の北二十六メートルに二十一×十七メートルの郭があります。その東下方十メートルに十二×三十三メートルの郭が認められますが、これらの屋敷はあります。その東下方十メートルに二の丸と称する二×五十三メートルの⁽¹²⁾があります。二の丸の南にメートル下方に二の丸と称する二×五十三メートルの⁽¹²⁾があります。

さらには、二の丸より北へ十メートルに二×十五メートルの⁽¹³⁾があります。本丸の東下方九メートルに袖曲輪⁽⁶⁾があります。さらには、二の丸より北へ十メートルの毘沙門堂⁽⁴⁾があり、現在もお堂が建っています。城平野はどちらかはるか米山から信越国境の山々を望むことができます。本丸の北下方に削平地をめぐらして、天守から展望はきわめてよく、日本海や南北十八メートル天守⁽³⁾があります。これら本丸、天守からの展望はきわめてよく、日本海や南の南に堀切⁽²⁾幅六メートル、長さ十メートル(きはみで東西二十五メートル、本丸⁽¹⁾は、東西二十一メートル、南北三十三メートルで現在は南側が若干風雨によつて流れています。

本城地区

はなく、後世になつてから古城図などにより名づけられたものです。
て現在城址に立つてある標識に示された名称をとめたもので、この名称は当時からの固有名称で説明にあつたて一言おひとりしておきますが、ここに出て来る各曲輪(へるわ)名は、すへ

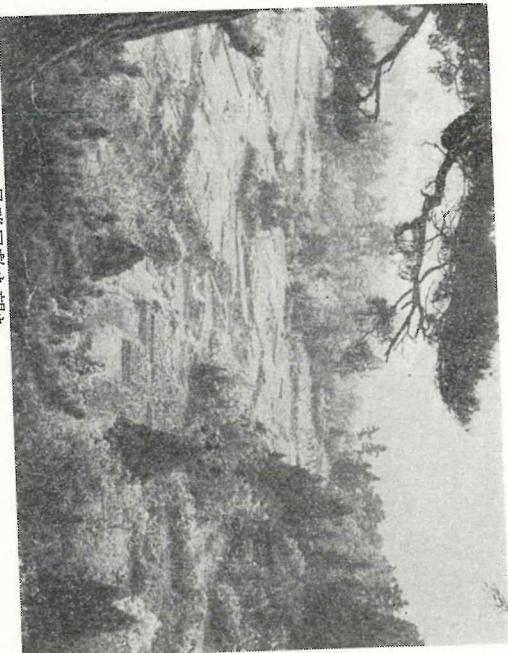
春日山城址の実測



春日山城址実測図

実測日 昭和43年8月

実測者 新井高校・糸魚川商工高校・柿崎高校・
直江津高校・高田北辰高校・安塚高校 各社会科クラブ

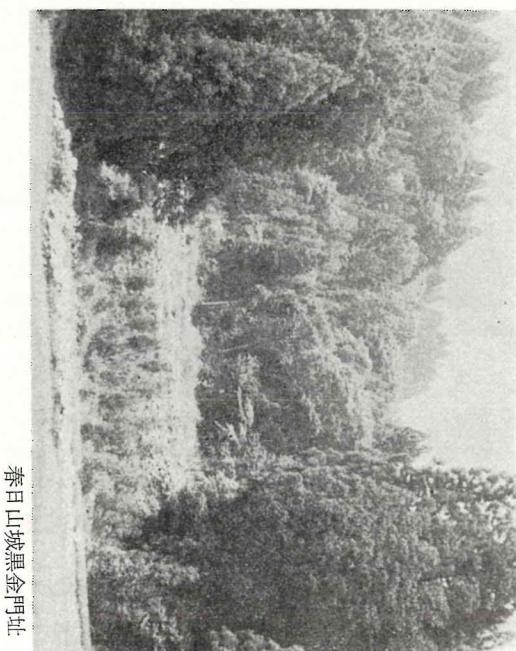


らは南にのびる追手地区が一望に見わたされず。その東下は約十八メートルの切崖で追手道が空堀と通じ、さら大切庭で、その下に小曲輪を重ねて対馬谷に落ちています。西下は大小いくつもの削平地を配し、先は急な背後の谷に落ちます。稜線は南にのび、急な崖と曲輪に続ります。横堀(4)が広いところは巾約七メートル(5)で御成街道(6)を隔て西にのびる尾根には、宇佐美駿河守屋敷址(23)や広い台地(24)(約四十九×二十六)がありその先端に土壘をめぐらし、さらには大空堀(5)が尾根を断っています。また、南にめぐつてのびる尾根は、横堀(4)が縱堀(8)となつて対馬谷に落ち、稜線を断ち切ったあと、謙信四天王の一人、柿崎和泉守屋敷址

城の中央本城地区の稜線が西南にのび、それが西と南にゆるく分かれることなっています。そして、城の追手大手¹²は対馬谷¹³であつたと考えられます。その道は尾根に添つて登り、景勝屋敷¹⁴と天守の麓をそれで半円形にまわり、最後は、一の丸から本丸に達していません。地形をうまく利用してつくられていて、敵が一列か二列の縦隊で登つてくるより仕方がないよう工夫されています。そして、追手地区は本丸や二の丸の本城地区とは、一本の空堀¹⁵で区切られた一城別郭の築城であるといえます。それは、追手地区は本丸下の井戸丸¹⁶を中心曲輪の大井戸(直径六、水深約十メートル)を堀り、その先に約十三メートルの切崖をもつた第一の空堀¹⁷のところからはじめられます。続いて鐘楼址の曲輪¹⁸(約二十一×十八メートル)を置き、さらに第一の空堀¹⁷のことからはじまります。続いて鐘楼址の曲輪¹⁸(約二十一×十八メートル)を道¹⁹とし、本城地区の別郭として、大小の空堀、横堀、水堀、泥田堀、切崖などじを配し、迷路部を構成します。このように、一本の深い空堀に続く景勝屋敷¹⁴(約二十七×七メートル)の台地に手を加えていました。

追手地区

卷之三



春日山城黒金門址

(19) (約) 約六十六×五十六メートル(や)、南に下がって、南二の丸⁽²⁰⁾、鬼小島弥太郎⁽²¹⁾、黒金上野⁽²²⁾など、介(22)などの尾敷址の標柱の立つて、いる曲輪が階段状に配置されていてます。さらば、南にのびる尾根を大空堀⁽²³⁾が切り、追手道に通じてます。その道に添つて両側に大小いくつもの削平地や空堀を置き、春日山背後の守りと物資輸送の御成街道を追手(大手)道の警備に万全を期していたことがうかがえます。

搦手地区

搦手地区は本丸から東北にのびるやかなる尾根で、愛宕谷⁽²⁴⁾と但馬谷⁽²⁵⁾とにさまれた地域です。この尾根の中途に春日山神社、山麓に林泉寺があります。比較的規模の大きな曲輪が花畠⁽⁵⁾の下に門曲輪⁽²⁶⁾(十四×六メートル)があり、三十八メートルの直江曲輪⁽²⁷⁾があり、その下に十三メートルに幅四メートルの道路⁽²⁸⁾があります。この門曲輪下四・五メートルに二十一メートルに幅四メートル的道路⁽²⁹⁾があり、昔日の面影をそのまま今日に伝えていきます。直江曲輪から一つの曲輪を下ると、深さ十二メートル、幅五メートル、長さ十五メートルの空堀⁽³⁰⁾更にその下七メートルに空堀⁽³¹⁾があり、空堀⁽³²⁾の北端に千貫門址があります。

春日山神社⁽³³⁾と社務所がある平地は、七十メートルの広い曲輪です。(34) これが老母屋敷といわれている所です。老母屋敷の東に馬場といわれています。



御館城の発掘で出土した柱穴（左上は外濠）
内上杉家の家督と職を継ぎ、自然、関東へ越後
信は永禄四年（一五六一）、上杉憲政から関東山
越線と北陸線が交わるあたりに築きました。謙
ある憲政のため、館を越後府城の西郊、今的信息
十年のことです。謙信は、自分の主家の宗家で
杉の地、長尾景虎に救いをもとめたのが天文二
者前に潰れ去り、古い、ゆかり深い、越後上
関東管領上杉憲政も、北条や武田のうな実力
く消え去つてしましました。乱世の前には名門
悲運を感じるかのように、遺跡もまた、跡形な
て生まれのちに謙信の養子となつた上杉景虎の
(御館の乱の際)、小田原城主北条氏康の子とし
したが、主人公上杉憲政は、敢ない最期をとげ
で、御館城は府中の西郊に威風堂々たるもので
入れるために造営した事が、立証されました。その頃、越後の首都是、人口五、六万の大都市
御館城については、発掘によつて、古文書が伝えたように、上杉謙信が、関東管領上杉憲政を迎
御館城

春日山を廻る城

及び直臣園の曲輪群であつたと考えています。
道があり、この道が御館城(直江津市)に通する大道⁽⁴⁾です。この搦手地区が、上杉謙信と家族
黒金門址⁽⁴⁾を下ると蓮池⁽⁴⁾があります。これが在城時代の内堀です。この堀のほとりに搦手の
ます。この地域一帯には、上質の白磁、青磁、カワラケ片等が散在しています。
御屋敷の西に十数段の削平地があり、その中にはじゅうろう(上臈)屋敷と称する曲輪⁽⁴⁾もあります
メートルになります。これが城主の御館にふさわしいので、根小屋地区と考えられます。また
千貫門址の北側の道を下ると、右近畠⁽⁴⁾と御屋敷⁽⁴⁾と称する曲輪があり、これを合せると六百
する曲輪⁽⁴⁾(七五×三メートル)があります。この間を大空堀⁽⁴⁾で区切っています。

の山野を見渡し、将来の夢を描いたとか、兄晴城

岩手城を望む
少年時代の謙信が、この山頂に立つて、頸城

です。

のよう、鶴翼を張るのが米山(九三メートル)

頸城平野の東方を限って、山の象形字そのもの

にうち寄せる日本海の荒城が遠く消える所に、

春日山城頂に立つて東方を望むと、犀浜砂丘

岩手城

査経過報告書。

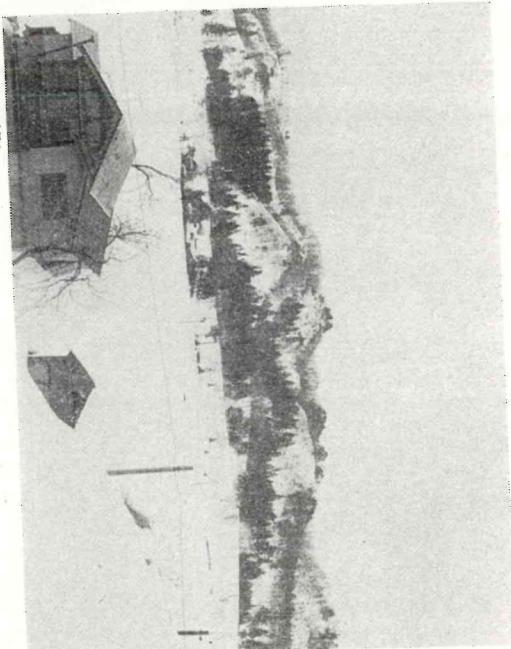
と指摘されたのは伊藤正一氏です(御館緊急調

と十八号線付近、現在の八幡神社の東側あたり

越後府内城の位置は、おおよそ、国道八号線

いきしへせるものがありました。

もあつたお館の乱の慘劇(景勝と景虎の相競争

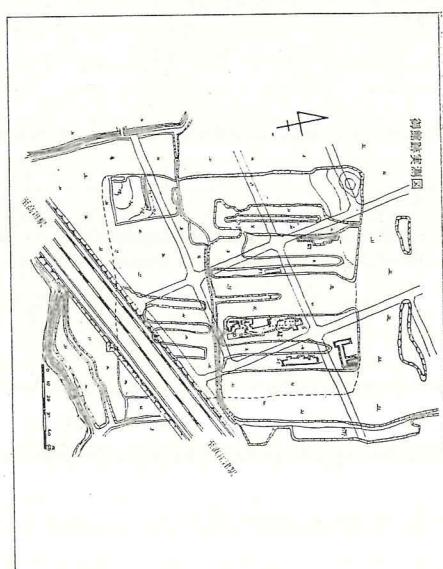


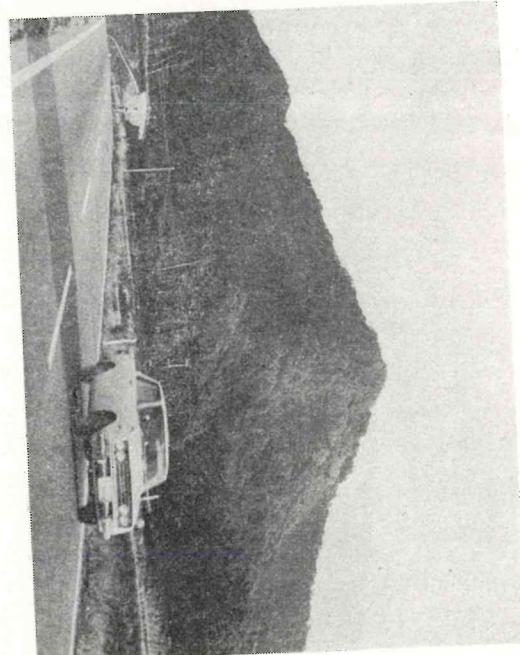
井戸生活道具も出土 (5) 射撃銃弾も数個あり、鉄砲攻撃
鮮・日本の陶磁器の優秀品である須恵・かわらけ・古
御殿形式。(3)お館の乱には焼けなかった。(4)中国・朝
つて使用された。(2)建造物は堀立式、板塀(瓦はない)
を概略して述べると、(1)謙信・景勝・堀と三代にわた
新潟県教委・新潟大学・直江津教委が発掘した結果
貢参考)。

外側に、土墨をめぐらす大規模のものでした(二一六
堀に添い高さ三メートル以上上の土墨をめぐらし、その
館)をよく訪れました。館は百七十メートル四方、内
謙信は、国分寺、浜善光寺とともに、憲政のいる「御
御殿跡実測図

の役割は、春日山城内の御屋敷や、本丸が果たしました。
佐渡統治の府城とします。しかし、実際の政庁として

実測したもの
この図は御館の発掘の際に





旗持城を望む

す。宇佐美房忠は、はじめ小野城にこも
れが出土して、古戦場を立証していくま
百メートルの広さで、周囲は急崖です。
に突出する舌状台地で、百メートル×五
十メートルの本丸、その真下に熊手状
に浅い縱堀が並ぶ、奇妙な遺構があります。
橋原は、岸手城にたいし、黒川谷
線は二十メートル×三十メートルの断崖
東北側は急斜面、西南谷口側は緩く、山
たるにたてになりました。小野山塊は
中心の小野山塊各処の砦(約三キロにわ
討伐軍を起したのです。岸手城と小野城

しましたが、房忠の主家出身の守護上杉定実を輕視する行動に義憤を感じ、上条上杉に代つて、
忠は、長尾為景が前守護上杉房能を自殺させ、その兄関東管領上杉頸定を戦死させて越後を制圧
岩手城の反対側に、黒川谷口をおさえる小野山塊の突端台地が、橋原古戦場です。宇佐美房

小野城と小野壁

奮戦、ついに自刃した城です。

永正十一年(一五一二)、上条上杉定景の重臣宇佐美房定が、長尾為景打倒の義軍を起し、約一年
を大手としています。室町時代初期、上杉氏第一代憲将を守った宇佐美氏の築城とみられます。
に、第一、第三の砦を設けて中心と結び、館と黒川へりに構えて黒川谷を搦手、南方東頸城向き
トルの本丸を築き、空堀と切崖で囲み、数段の曲輪を両側に重ね、東西にのびる尾根上の三角点
した山城です。いつもか雲をひろげたような形の主壘百七十メートル×一十メートル×十メー
岸手城は、米山南方と西麓の大都を占める黒岩・黒川の谷の谷口にあつて、黒川河岸段丘を利用
したこと事実です。(三八頁写真参照)

い不合理なもので。とにかく越後を平定するために、米山裏表の一いつ峰を、いくたびも往來
景の軍を破つたとか、江戸時代の武将伝創作家・宇佐美定祐の文節にあるが、この地に合致しな

柿崎町城館址配置図
昭和41年11月現在調査
◎宝岡博



1.木姫城址 2.西油城址 3.大清水城址 4.旗持城址 5.蕨野城址 6.川田城址 7.山田城址
8.小野城址 9.柄ヶ原城址 10.米山寺館 11.米山寺城 12.芋島館址 14.黒岩城址 15.石手城址
イ米山菜師 ロ密藏院 ハ東泉寺址 ニリょう巖寺 ホ円蔵寺址 ～大泉寺(大清水観音)

つて、親交を重ねたのを見ても、景家の人がら
かれて、柿崎の芋島館内建立の桜巣寺住職とな
ります。謙信幼時のお天室和尚が、景家に招
明けつ放しの景家は、お館の乱に際し、残党ら
じうでしょう。柿崎の魚を食べ、荒波に育った
る故に、越後統一の犠牲者とさせた、と見ては
内域に二万石の高嶺の上、米山関門の要所であ
れる等々。運命の神は、強過ぎる者、領地が頸城
柿崎氏の家臣では、討死と見せ、逃れと記され
攻滅はされたらしく、信州屋代柿崎や羽州酒田
征伐の軍を起こす直前に柿崎一族が、木崎城に
鉢形城に送られました。天正六年、謙信が北条

です。子晴家は、北条氏康の子が、謙信の養子(人質)になつたとき、相質となつて、武藏
兵も同様でしたが、「景家に分別あれば越後に及ぶ者がない」と謙信に見えたのは、派っ子らしい
して突込んだのです。柿崎の浜育ちらしく、多弁、精悍、情緒豊かな快男児は、景家をとり巻く將
の旗をなびかせて、越軍先鋒をつとめ、武田信玄めがけて、得意の大長刀を風車の如く振りまわ
景家は、謙信の四天王の一人に數えられた豪将でした。永禄四年の川中島大決戦に、大難(ひがい)
崎城は、古くから地頭職の政庁となり、豪族たちみな柿崎氏を称し、中でも柿崎和泉守弥二郎
以降は柿崎と呼ぶこの地は、米山峠と黒川川口の交通要地、物資集散地として繁栄しました。木
湿地や川床をつくって、絶好の平山城地構築条件をそなえるのが木崎城です。古代は佐味、中世
り残された砂丘四条の西側を削り、砂丘(三十三メートル)の周囲を、米山川と小河川が流れ、
柿崎駅の南方約一キロ、黒川の流れが海岸砂丘に圧迫されて蛇行し川巾広く、緩く、深く、と

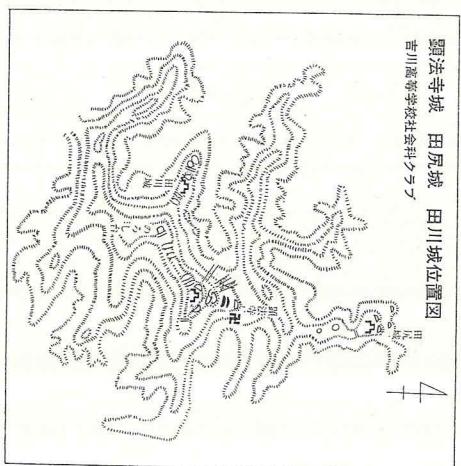
木崎城

繩張り構造は大きくなく、築戦のための城のようです。
り、柄ヶ原等の山裾岩のいくつかを利用、為景軍を引きつけ大いに苦しめたようです。小野城の

城です。

頸法寺城
(吉川高校調査)

頸法寺城 田尻城 田川城位置図
吉川高等学校社会科クラブ



木崎城から見ると、真東、米山の真下、平地の奥まで約四キロの地点に雁海城があります。木崎城を居館とし、これを居城としたもので、城頂は標高百八十メートル、山頂を自然のままにして(土盛りした墳状のものがある)西方を大手、東方を搦手として、防備工事や、曲輪工事を施しています。柿崎氏の作戦城郭です。詰の城は海側要郷のよねやま駅の東南上上の旗持城、山側要郷には猿毛城があります、後に春日山狼煙城として重要な役を果します。

築城は古く、『村山文書』によると、長平十年(一一五五年)杉憲将(憲頸の子で越後守護職)は東頸城安城、直峯城(頸法寺から約南へ約十キロ)の南朝方の將風間長頼(風間信濃守の子)討伐のため兵を、この頸法寺城に挙げます(この時は風間が北朝方、憲将は南朝方)。合戦の火ぶたは、頸法寺城の東約六キロの山直海古戰場で切れ、憲将は部下の宇佐美、柿崎藝を引きつれ田尻城で戦ったが敗れ、柿崎城(雁海城か)で防戦したが遂に破れ、降伏します。

頸法寺城には尾根統きに、田尻城・田川城(町田城)があり、本城支城の関係にあつたと思ひます。米山関門にある猿毛旗持とともにその後は春日山の見張城となり、番城となりました。

かよくうかがうにときがで、大變難いといひです。

（眞）に塩や魚類を送るにことを禁じてしまつたのです。そのため甲斐の人は非常に苦しんだのです。これも伝えて聞いた謙信は「これはひどいにござるものだ。戦争は弓矢でおなじみの、食物で相手を困らせるのは非常に卑怯なやりかただ。信玄は敵であるけれども、甲斐の人びとを救わなければならぬ」として、領内の商人に命じて越後国から、塩や魚類をどんどん送り出しました。これを見ても謙信はいかになさけ深く、戦争も正々堂々とやつたことがあります。

謙信は酒を非常に好み、つねに縁側に出て飲んだといいます。その酒の量も多かつたのです。

謙信にまつわる話

堀秀重、秀政、秀治三代の墓、松平綱豊と母土佐の墓、また榎原政學の墓などがあります。そして老松古杉にかこまれた墓地には、謙信の墓をはじめ、川中島戦死者の供養塔、さらにはじめとするたくさんのお寺宝が展示されていて、高田、直江津百年の歴史を語りかけています。境内には謙信が寄付した宝門があり、山門には有名な「春日山」「第一義」の額があつていて、庭園があります。庫裏の一室には、謙信のめりし日のおもかげをしのばせかずの遺墨や遺品をはじめとするたくさんの寺宝が展示されています。さらにその後高田にきた大名はみなこの寺を大切にしました。

上杉氏は、景勝のとき豊臣秀吉によつて、会津に国替えさせられてしまつたのです。そのとき謙信時代のものは、全部持つていつたのです。後に堀氏がやつてきて、上杉氏と同じく林泉寺を菩提寺としたのです。さらにその後高田にきた大名はみなこの寺を大切にしました。

この寺は代々名僧があつたので、全國屈指の有名な寺となつたのです。

創建したもので、曹洞宗の寺で、開山は名僧圓英惠応(じゅういえいおう)禅師であります。しかも信の祖父長尾能景(よしかげ)が、亡父重景の十七回忌の法要をするのに、明応六年(一四九七)に春日山の山あいに静かにたたずむ林泉寺は、上杉氏の菩提寺であります。この寺は謙信の寺は代々名僧があつたのです。

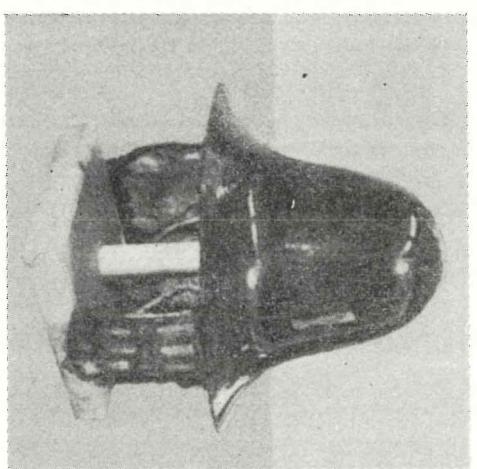
林泉寺について

かし実は、十二月一日にみちを食べる風習は古くからあり、水難をまぬがれるといつてます。前までは、十二月一日になるご子供達が、夜明けに「川たりもり」「川たりもり」とひびが前にも、景気がつけて家来にもちをつかせ食べさせたことに由来するといわれています。ほんの少し前で、江戸時代に家来にもちをつかせ食べさせたときに川中島合戦の日にちが売りません。このもちは謙信が川中島戦の年に、景気つけに家来にもちをつかせ食べさせたことに由来するといわれています。ほんの少し前までは、十二月一日になると高田では「川たりもり」

川たりもり(川渡りもり)

謙信愛用のかぶと

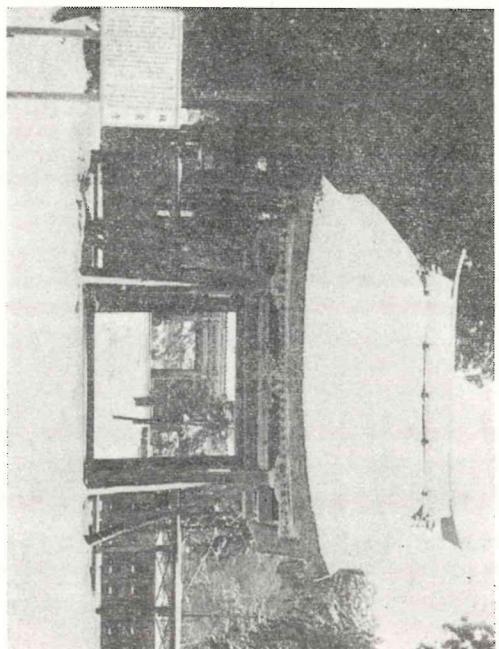
す。今でも高田近辺で古い人はこの言葉を使つてたことを「お立ち」したという言葉で表わしています。ついでに、「お立ち飯」あるいは「たんじお立ち」などと食事をすめます。そして普通に食へた以上に食へる



ないような大活躍です。女子生徒のつくるた食事を皆で食べ、そのあと、春日山の歴史や上杉謙
げと木に登り、大のまうに崖を上り下り、草木をかき分けて、休息の時間もなく、日暮まで疲れを知ら
に分けました。教師と生徒は、全く意気投合、志氣旺盛、日頃修練の腕前を発揮、猿(ま)しまらの
には糸魚川商工・直江津高・北辰高、追手地区は新井高・吉川高、搦手地区は柿崎高・安塚高と三隊
日間、教師・クラブ員・先輩など総勢九十名、春日山城址に立ち向かいました。手勢を、本城地区
は活動計画樹立のため、まず予備調査を実施しました。綿密な計画を用意し、八月六・七・八の三
昨年は、最大にして最高な研究課題、春日山総攻撃に全力を尽すことを決意し、四月十四日に
会同人は、すなわち上越高等学校社会科クラブ山城班を指導する教師たちなのです。

『上杉謙信の足跡』出版は、私たち上越城郭研究会会同人の、多年の念願でした。上越城郭研究

あとがき



泉寺は昔の面影をじどめているのです。
林泉寺山門(かつての春日山城門と伝わる)
このように林泉寺境内にはいろいろな史跡が
あり、また境内全般は四季の景色が美しく、い
るいろな鳥がさえずり、雪消えじ同時に雪椿が
咲き、水蓮やあやめ、秋には全山もみじ、そ
の趣を変えていきます。の中にひそりと林
泉寺は昔の面影をじどめているのです。

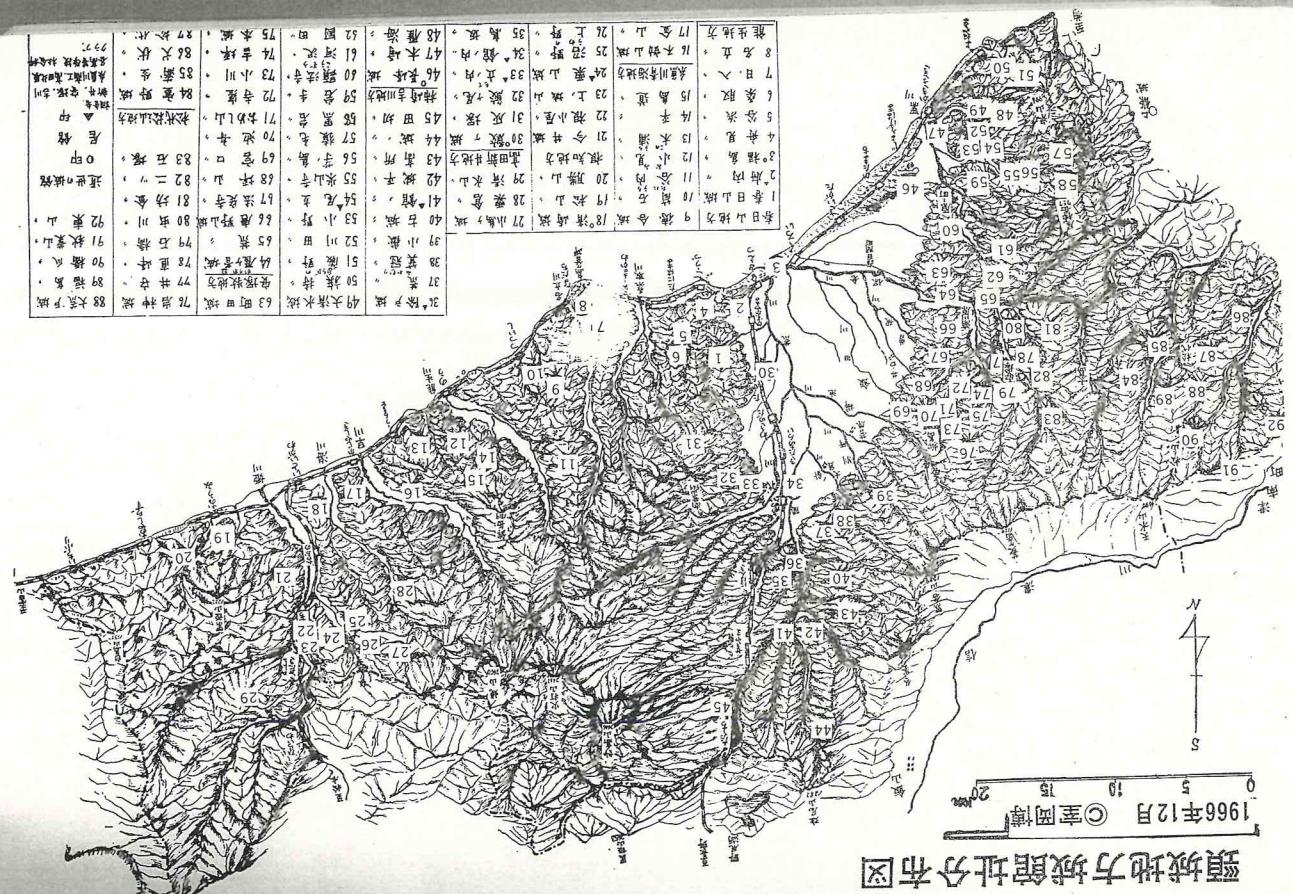
あり、古くはこゝも春日山城の城郭の一つであ
また墓地をとりまくむうに空堀がめぐらして

つたことを証明しています。

信について勉強し、一学期を重ね、深夜まで学校で図を繰り返し、こうして三日間でした。これまで各校がまとめた、春日山を中心の頸城地方の城館址に関する実測図は、百に近い数のございました。おおよそでは『頸城地方における中世の山城研究』全三巻に収録発刊しました。次に、私たち上越城郭研究会そのもの足跡、すなわち、この書を生み出す過程を述べます。三十九年、頸南地方総合学術調査(新井・板倉・中郷・妙高・妙高高原の五市町村主催)が開始され、その考古部門を担当(室長室岡)活動を開始、四〇・四一年の三年にわたり、松ヶ峰遺跡発掘実施教師、生徒とともに、妙高山麓の雄大な高原にキヤンブして発掘をおこなう。四年四月、鳥羽正雄先生を迎えて、能生町徳合城・糸魚川市不動城・勝山城・高田市春日山城を調査(糸魚川商工高校主催)指導を仰ぐ。三十九年十一月、第一次「越後国府国分寺及び御館城調査」がはじまり、新潟県教育委員会と新潟大学の予備発掘に協力。

四年三月と八月「越後国府国分寺御館城調査」が直江津市・新潟県教委・新潟大学の共催で大々的に実施され、附近の中・高校の運動員があり、花ヶ前、室岡の調査員はじめ、社会科クラブの教員は大活躍をした。炎天続きの盛夏のじり、しかも長期間にわたるもので、体験をじよ

頸城地方城館址分布図



四十年四月十三日から三日間、春日山調査(高田市文化財保護委員会主催)伊藤正一先生の指導をうけ、実測に当る。

四十年六月五・六の二日間、柿崎町調査(柿崎町教委と上越城郭研究会共催)伊藤正一先生を講師に招き、岩手・猿毛・米山寺御館・芋之島館を調査、宇佐美房忠の城、小野城砦を見。

四十一年六月四日、柿崎町調査(柿崎教委・上越城郭研究会共催)米山寺城・芋ノ島・楞嚴寺を伊藤正一先生の指導をうけて研究。

四十二年七月一日、柿崎町調査(柿崎町教委・上越城郭研究会共催)川田城・小野城研究。

四十二年秋、『日本城郭全集』(人物往来社)新潟県の巻の上越・中越の城を執筆。

四十三年八月六・七・八の三日、春日山実測。上越高校七校、直江津市小丸山別院に合宿、東京より日本城郭資料館の西ヶ谷恭弘氏来援。

同年九月二日、青山学院大学教授井成広先生を高田市に迎へ、春日山城について学習。

同年九月二十一日、春日山実測図打合会。

同年九月二十一・二両日、長野県屋代に宿泊、屋代附近の城址、妻女山、海津城、川中島を実地調査。屋代柿崎一族の深甚な好意をうける。

同年十二月二十六日春日山実測図検討会。

四十四年一月二十二日、直江津高校において打合わせ会。謙信の人間性討議。

同年一二月二十五日、原稿をまとめて上京。同年一二月二十七日、原稿をまとめて上京。日本城郭資料館において最終的な契約を行つ。

この書は、高等学校社会科クラブを指導される教師、すなわち上越城郭研究会員が筆をとりて開く。出版の構想を決定。

同年一二月十五日、原稿検討会を高田市において開く。出版の構想を決定。

花ヶ前、瀧沢、松木、室岡、花ヶ前、瀧沢、松木、日本城郭資料館より西ヶ谷氏来援。

同年十二月十日『謙信の足跡』出版を協議。

同年一二月二十六日春日山実測図検討会。

同年一二月二十二日、直江津高校において打合わせ会。謙信の人間性討議。

同年一二月十五日、原稿検討会を高田市において開く。出版の構想を決定。

この書は、高等学校社会科クラブを指導される教師、すなわち上越城郭研究会員が筆をとりて開く。出版の構想を決定。



は二千名以上です。創刊号機関誌には高木周一先生(上越高校社会科研究会長)からお言葉をいたしましたが、そのかぎの資料提供者は社会科クラブ員すなわち生徒諸君で、五ヵ年間の延べ総人員
上越地方の城館址分布図(二六九頁)は、遺跡台帳作製(昭和三十六年・文部省・新潟県教委
共催)の際、調査員だった先輩(青木重幸・中川恒三・伊藤信太郎・青山正久・鶴野平之郎・東条勝・
平野田三・泰繁治・惣山欣一・小野塙正・五十嵐静夫・室岡博)達の調査資料に基き、その後、上越社
会クラブや上越城郭研究会が、新たに発見したものを加え、鳥瞰図に位置図を記入したもので、作
図は上越班長であった室岡です。後輩の調査活動の資料ですが、また郷土の聖雄上杉謙信公の活
躍舞臺を概観し、英雄の心事を推察するとともに、四百余年の昔、暗黒な乱世を生き抜くため
に、私たちの祖先達が武将たらを頼り、支え、そして戦ったのかを知る資料です。一巻では和泉
春男君。(新井高)三巻では碓井高君(柿崎高)が序文を記しました。

以上のとく、高等学校社会クラブの生徒の活動は、たゞ郷土の歴史研究に役立つだけではなく
私たちは『上杉謙信の足跡』を著述するに当つて、これまで述べたような、六年にわたる年月
もつて体験したのであります。拙い著述ながら、誠心誠意、体と心を打ちこんで、極力正しい謙
信公を深きほどにした点をおくみ取りいただきました。思ひます。

私たちは『上杉謙信の足跡』を著述するに當つて、これまで述べたような、六年にわたる年月
最も正しい本、『上杉謙信伝』をぜひ御愛読いただいて、私たちの上杉謙信の足跡を御批判い
わかり易く実証して、謙信公を誤らない本。それだけ、寒測図や資料を割愛しませんでした。

信公を深きほどにした点をおくみ取りいただきました。思ひます。

最も正しい本、『上杉謙信伝』をぜひ御愛読いただいて、私たちの上杉謙信の足跡を御批判い
ただければ幸いと存じます。

御監修下さった鳥羽先生、桜井先生それに出版を御指導下さった小田原さんはじめ日本城
郭資料館の皆さん、ことに西ヶ谷さんには厚く御礼申し上げます。

◇監修者著者・代表略歴◇

鳥羽 正雄 (とばまさお)

1899年東京市谷に生る。東京帝大文学部卒。神宮皇學館教授、内務省考証官、鹿児島大学教授を歴任。文部省学術資料審議会専門委員、文部省史料調査委員を兼ね東洋大学教授に至る。(日本城郭資料館顧問代表)。文学博士。主著に「日本城郭史」(大類伸共著)、「日本の城」「城郭と文化」「日本林業史」「城郭の歴史」など多数。

室岡 博 (むろおかひろし)

1910年新潟県に生る。高田師範専攻科卒(現・新潟大)。新潟県遺跡調査委員、能生町筒石小学校校長、新潟県頸城南部考古学調査部顧著を歴任。現・上越城郭研究会長、日本城郭資料館北陸支部長。主著に「越後先史文化」「鍋屋町遺跡」「松ヶ峰遺跡頸城南部地方古代文化」など多数。

定価 430円	
著者 室岡 (上越城郭研究会長 鈴木大長)	
発行者 印刷所 製本 発行所 日本城郭資料館 出版会 版	
博(上越城郭研究会長 鈴木大長) 治刷本館 春日山城と周辺の城	
1969年5月1日初版発売	
東京都港区芝3丁目36の2 東京書籍 (452) 8952	

いと、心からお願ひするものです。

弟同行、肝胆相照らす眞の教育活動の象徴として双手を挙げて推せんし、ぜひ御愛読いただきたい。数日前の調査を続け、それこそ一丸となってこの研究をまとめてお終でした。この書を師からは數十名の生徒諸君が教論各位とともに、寝食を共にして、汗と埃にまみれ、叢林をかづめぐり、私が感激しているのは、四十三年以降、春日山およびその近辺の大調査に注いだ研究熱でした。感謝しています。これらの活動は昭和三十八年ごろから繼續して行なつてゐるのですが、春日山および周囲の城郭調査などに研修を積まれてゐる姿を見て、私は心から嬉しい、常々上越高等学校社会科クラブを指導する七高校の教師各位が、しばしば私の学校に参集しで有名な春日山などがあり、視界に入るものがみな、新潟県の歴史につながるよううな所です。

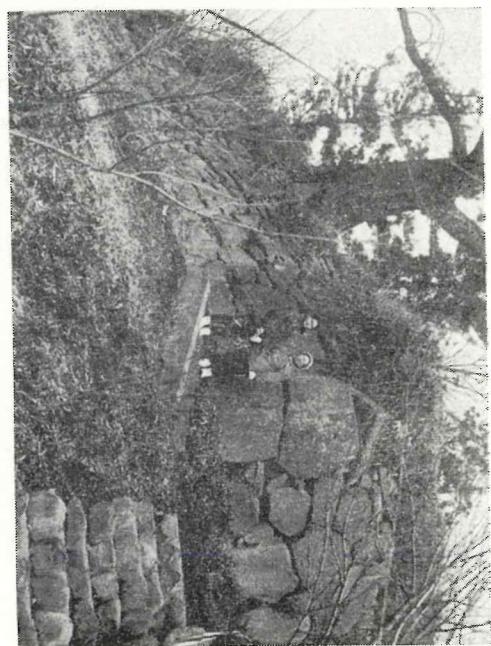
私の学校は直江津市街地の西北、直江津海岸砂丘上にあります。学校の南方、目の下には御館、古い国府あとといわれる福荷館、八幡社、西方に五智国分寺、少し離れて今テレビドラマ「天」と地といふ

黒崎恒夫

上越高等学校社会科研究会会長
直江津高等学校長

推奨のことば

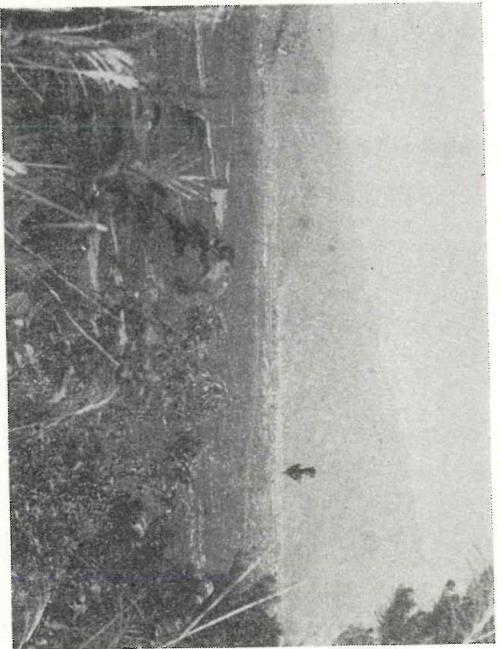
を重ねました。されど、北条氏政の子を養子に迎えるといふことは、和睦の条件の一つでしたが、氏政には初めからそんな気持はなかったのでしょうか。また、いかに戦国の世とはいえ人質同様な養子として、わが子を相手国に送るといふことは、親子の情としてのびなかつたのですから。元龜元年（一五七〇）を迎えると、北条国増丸を讐信の養子とする約束は、北条側の申入れで氏政の弟氏秀に変更されると同時になりました。しかも、懸案となっていました養子問題は、氏政の弟氏秀と株式会社となりました。事が定まるまで北条側の氏邦と上杉側の柿崎家憲を相互に人質として交換するといふ暫定でもありました。



養子を迎える

越。相の和睦は北条氏康の熱意で成立しましたが、氏政は自分の子を人質同様の養子に出すことをきらい、誓書の約束をはたさず、不誠実な態度をとり続けます。謙信は最初から氏政の心を見抜いておりましたので、約束が履行されることはなく、北条氏のための援軍は出しませんでした。和睦成立後の八月、謙信は越中に出陣して、椎名氏と戦っていました。信玄はそのすきみで小田原城を囲み攻撃を加えます。氏康は使ひをとばして、越後軍に背後から救援をきたのみましたが、謙信は出兵しませんでした。十一月に信玄は再び小田原をおびやかし、駿河(するが)静岡県(しづがたけん)に侵入して、北条氏支配の諸城を攻撃します。謙信は十月末に越中を平定して春日山に帰りましたが、関東の情勢が急を告げているので、兵馬の休みをとる間もなく、十一月下旬に沼田城にかけつけました。謙信の関東出陣を氏康は大変喜んで酒、みかん、干海風、干物などを持ち譲りに贈つて感謝の意を表わしています。翌元龜元年(一五七〇)正月関東で越年し、その経営に努力

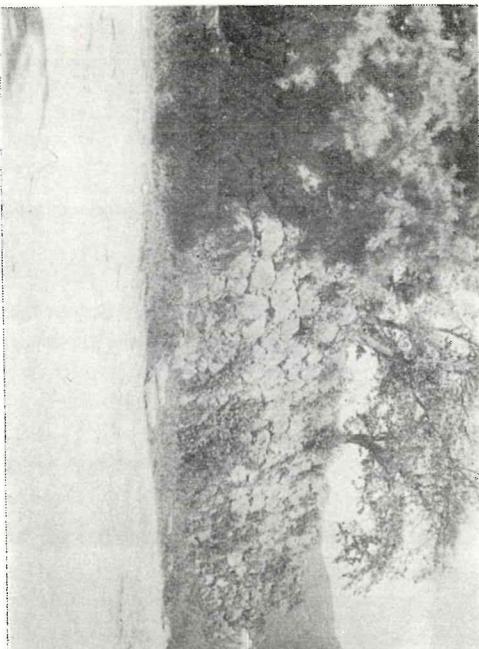
崩れていく要因をもつたものでした。



美女山より川中島一帯を望む(矢印は海津城)

つけていた。この謙信のすがたを見た部将たちを顔にふくみ、小鼓を打たせて謡曲をうたついた。謙信は来る日も来る日も、平然として笑み退するなどを、謙信に説く部将も出てきましなかには早くも動搖し、早めに善光寺方面に撤この信玄の退路を絶つ作戦を感じて、部下のよ。

しき受け、ひゞめ熱気をはらんだいでござる。十キロメートル、数多くのぼり旗が暑い日ざした。両軍の対陣はなれでにらみあつて約の退路を完全にふさぐにならうと思われました。しかし、海津城と東西に力をあわせて、謙信軍でした。この時には、信玄側の兵力が約一万人に善光寺平をはさんだ反対側の茶臼山に陣取ります



川中島合戦で武田の根城となった海津城(写真は本丸の天守台)

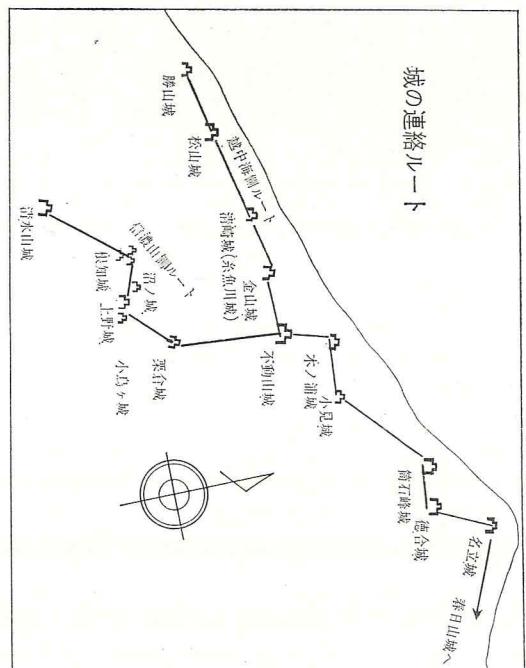
であります。こうして出発後六日目に、美女山へこどき待つたのだ」と、布施博士はいはなつ考え、また、ひとつは信濃の諸將がかれにつづれおどしました。これは、「ひとつは敵状の変化をが、和田峠を越えてから急に進軍の速度をへて信玄に従いました。諏訪路から進みました義信、弟の信繁のほか名のある部下の諸將はずす甲府をたち一路川中島へと急きました。長男の万七千人の大軍を率いて、八月十八日、信玄はる一大決戦の覚悟のはじを見てとりました。一信玄も、謙信の雌雄(しゆう)を決しようとする者を急いで飛ばせました。この報を受けたの来攻をのらしをあげて甲府の信玄に告げ、使しました。その上、弓、鉄砲で嚴重にふせぎ、謙信

北陸の陣とは
謙信の「北陸の陣」といいうのは、越中・能登(石川県)・加賀(石川県)・越前(福井県)など武将や、一向宗徒(真宗寺院に属する信徒)が、信玄や信長に政治的にあやつられ、春日山城を攻撃しようとしたり、また越中方面に住んでいた謙信の味方の武将達を苦しめたりしたのに對して、謙信が軍隊を出して行動していくのです。
北陸の陣で、まず謙信が越中方面に軍隊を派遣したのは永禄三年(一五六〇)に推名康胤(しなやすたね)を助けるために神保良春(じんほよしはる)と一緒に戦をはじめた時に始まります。それからは、越中方面に住む諸豪族達と或る時は友となり、或る時は敵となり心のゆるせない年月が続きました。そのうち、ひらに軍馬を進めて一向一揆と争つたりしながら、能登・加賀・越前まで進出し、飛彈(岐阜県)をも手に入れました。

北陸の陣 信玄との攻防

でした。

これで見ると、見なければなりません。戦国にみる異にするのです。しかし將軍は謙信の意を聞かず、惜しくも謙信一念奉公の精神は、夢と消えたのです。「將軍いまだ思慮足らず。必ず悔ゆるる日あらん」と慚愧の心を残しつつ、滯京四カ月あまりで、いろいろな思い出をもらながら、その後の忠誠を誓つて越後に引きあがみました。
莫大な費用をつきこんだこの上洛は、はたして謙信をじのように成長させ、手に入れたものには何んだったのしようか、結果的にみて、天子が將軍の治政を助けるといつぱりとぞげるにとがりなかつたわけですが、その後の謙信の躍進できなかつたわけですが、その後の謙信の活躍に間接的に現れていますがなればならぬの



西

春日山合戦繪図



私たち、郷土の城郭を調査する同人、ひとしく感じたことは、春日山を中心、頸城地方を大城塞とみなした雄大な繩張り、各地に堅固な小国を築いた豪族の制圧、そして、困難な地形や自然条件を克服して、春日山への統一を成就した気魄などにただ敬服するのみでした。しかし、われわれの祖先たちは、旧日本軍時代にも日本一の強兵を誇った点にからみ、私たちも雪に育った忍耐力と人の良さを誇つてよく、謙信をさえた越後人の価値を見逃がしてはならぬと思いました。

「天と地」の宇佐美定行は謙信の軍師か、これは謙信死後約百年の江戸時代の寛文元禄の頃（一六〇一—七〇〇）米沢の上杉藩に、宇佐美定祐という人物がいて、その時代に流行した武将伝記ブームに便乗する目的で、当時、江戸で大いにもてた甲州流軍学に刺激されて、越後流軍学創作を考え、宇佐神流軍学を樹立しました。そのため、祖先で枇杷島城主と称された宇佐美定満が、わざかに、謙信麾下に活動した記録を拡大、大軍師に仕立てたのが誤体のはじまりです。定祐の父勝興もまた、上杉藩に残る貴重な文献も参照せず、他国において、「越後記」・「北越軍記」・「宇佐美系図」を著し、それにより紀州候に任用されたのです。これらが、その後の「天と地」といふ意味です。

私たち、郷土の城郭を調査する同人、ひとしく感じたことは、春日山を中心、頸城地方を大城塞とみなした雄大な繩張り、各地に堅固な小国を築いた豪族の制圧、そして、困難な地形や自然条件を克服して、春日山への統一を成就した気魄などにただ敬服するのみでした。しかし、われわれの祖先たちは、旧日本軍時代にも日本一の強兵を誇った点にからみ、私たちも雪に育った忍耐力と人の良さを誇つてよく、謙信をさえた越後人の価値を見逃がしてはならぬと思いました。